

パキスタン人農業研修生受け入れ事業計画

2003年6月17日

飯島町国際協力会

1. はじめに

日本は国際貢献の一環として、毎年100億ドルものODA(政府開発援助)を発展途上国に提供しているが、そのお金が目的通りに使われていないとか、援助をしたが心の交流不足で、現地では必ずしも日本へのありがたみを感じていない、などの批判がある。

このため、ODAの予算の一部を、開発途上国外国人の日本国内研修に振り向けようという動きがある。

開発途上国の外国人研修生を日本に受け入れ、きちんとした研修を授け、現地へ帰ってそれぞれの分野での発展に寄与してもらうことによって、確実な国際貢献の実現と、日本に理解のある外国人を増やすことが見込まれる。

飯島町国際協力会では、農業的開発途上国の外国人農業研修生を日本に受け入れ、きちんとした農業研修を授け、現地へ帰って農業発展に寄与していただくことによって、農業分野での国際貢献を果たしながら、研修生を受け入れる地域に、研修費用を落とすことで、地域の発展に寄与することを目的とする、外国人農業研修生受け入れ事業を検討している。

この事業が、この地域のビジネスモデルとして、この地域に定着し、地域産業の発展に役立ちながら、日本国内にさらに広がったとき、この地域がこの事業のモデル地区として、その地位を確保していることを期待する。

飯島町国際協力会は、手始めとして、元在パキスタン日本大使館勤務、青年海外協力隊OB近藤陽子氏の紹介を基に、林檎栽培の普及を希求するパキスタン国ムルフン村を対象として、林檎(りんご)栽培技術を習得するパキスタン人農業研修生受け入れ事業を計画した。

2. 事業の必要性・妥当性

(1) ムルフン村側の事情

- (a) 林檎の栽培は、高所寒冷地であるムルフン村を含むパキスタン北部山岳地帯のゴジャール地区に適している。
- (b) 林檎の普及による農業収入向上が期待される。
- (c) パキスタン国内における林檎の需要は増加することが期待される。
- (d) 栽培技術を学べる国としては、日本の他にブータン、ネパール、中国、等が挙げられるが、これらの国々も日本から技術を学んでおり、林檎の本場である日本での研修を望んでいる。
- (e) 過去数年間に亘り日本との交流があり、今後も続くことが予想される。

(2) 飯島町 (伊那谷) 側の事情

- (a) 近年、国内では林檎の需要が低迷している。
- (b) 近年、後継者、担い手不足から、林檎栽培を断念する農家が増加している。
- (c) 休耕地・休耕田が増え、環境にも悪影響を及ぼしている。
- (d) 農地を有効利用するアイデアが求められている。

(3) 資金の裏付け

研修生受け入れ費用財源として、J A I C A (国際協力事業団) の出資が期待できる。

3 . 事業の目標と達成を図る指標

(1) 事業の目標 : ムルフン村側

換金作物としての林檎をゴジャール地域全体に普及し、共同出荷を実現する。その第一歩として、まずはムルフン村に林檎農園を作り、品質向上および増産を図りつつ、出荷可能な林檎を栽培する。

(2) 事業の目標 : 飯島町 (伊那谷) 側

- (a) 外国人の農業研修研修受け入れ体制作りの手始めとして、林檎栽培研修受け入れ体制構築を経験する。
- (b) 研修生受け入れ側での O D A (政府開発援助) 資金の消費の結果、関係者の収益を確保する。
- (c) 林檎栽培地の荒廃を防止し、農地の有効利用へのアイデアを広げる。

(3) 達成を図る指標

- (a) ムルフン村の林檎農園にて出荷可能な品質の林檎の収穫量の推定。
- (b) ゴジャール地域全村へ普及する林檎栽培面積の推定。
- (c) ゴジャール地区における林檎の共同出荷システム実現の推定。

4 . 研修内容

(1) 日本における研修期間

準備期間 : 2 ヶ月
農業研修期間 : 8 ヶ月
計 : 10 カ月

(2) 研修内容：準備期間

- (a) 日本語研修
- (b) 日本の生活習慣・マナー

(3) 研修内容：農業研修期間

(a) 林檎の品種改良および増産技術

国内での高い需要が見込まれる林檎は、寒冷地での栽培が可能である。既にムルフン村を含む数ヶ村で試験的に栽培が始められており結実していることから、栽培可能であることは実証されている。

(b) 共同出荷体制（視察のみ）

農業協同組合など、伊那谷の果樹農家を支える組織や施設の視察。将来ゴジャール地区全体でりんごの共同出荷体制を作ることを念頭に参考にしたい。

(4) 研修員

(a) 希望人数：3人

理由：難易度の高い研修となることが予想されるが、帰国後に習得内容を補完し合える。また、習得技術の普及と共同出荷システムの確立を広大な「ゴジャール地区」でより迅速かつ効率的に図ることが可能となる。地理的条件から1村だけでは出荷も困難。

(b) 学歴：高卒または大学卒

(c) 言語：母語であるワヒ語の他、公用語のウルドゥー語と英語を話す。日本語は全く話せないため研修が必要。

(5) 生活形態

アパートにて自炊。

5. 研修費用（概算を添付）

6. 研修生派遣側の状況

6.1 背景

パキスタン北部の山岳地帯には、世界的にも有名なヒマラヤ山脈、カラコルム山脈、ヒンドークシュ山脈のいわゆる三大山脈が連なる。観光開発は一部地域に限定されているものの、四季を通じて外国人観光客が訪れ貴重な収入源となっていた。ところ

が 2001 年 9 月にアメリカで起きた同時多発テロ事件以降、パキスタンはアフガニスタンに隣接する国として世界中から注目を集めると同時に、観光客は激減した。山岳地帯の住民は、政治的・経済的状況に左右される観光ではなく、従来の主産業である農業による経済基盤強化の重要性を再認識するに至った。

6.2 ムルフン村

(1) 位置

パキスタンと北側の隣国である中国とは、カラコルム・ハイウェイ (KKH) と呼ばれる道路によって結ばれている。北部の山岳地帯を縫うように走るこのカラコルム・ハイウェイの建設は、中国とパキスタンの合同事業として 1966 年に始まり 1978 年に完成した。以来、この道路は物資の輸送だけではなく、観光にも重要な役割を果たしてきた。首都イスラマバードから中国との国境であるフンジェラール峠 (標高 4,700 m) までの距離は片道約 900 キロである。

中国との国境に続くカラコルム・ハイウェイの北部地域は「ゴジャール地区」と呼ばれ、ワヒ語を母語とするワヒ族の居住区として知られている。ムルフン村は人口約 1,000 人の小さな村であるが、ゴジャール地区の中心的な役割を果たしている重要な村の 1 つである。理由は以下の通り。

- (a) 広大なゴジャール地区内の、カラコルム・ハイウェイから外れた交通の便の悪い場所に位置する村々とも血縁があり、交流が盛んである。例えば、カラコルム・ハイウェイ東方に位置するシムシャル村や、北西に位置するチプールサン村は、カラコルム・ハイウェイからそれぞれジープで半日の距離にある。公共の輸送機関は無く、ジープ道は雨や雪による土砂崩れのため頻繁に寸断される。ムルフン村は、これらカラコルム・ハイウェイから外れた場所に位置する村々とを結ぶ中間地点に位置している。
- (b) ムルフン村にはゴジャール地区に数少ない女子高校の 1 つがあり、スクールバスを利用して近隣の 35 カ村から生徒が通っている。
- (c) ゴジャール地区唯一の村立図書館を所有しており、移動図書館のサービスを実施している。この図書館はムルフン村の住民によって自主的に建設されたもので、現在 4,000 冊を越える蔵書を有する。

(2) 民族

ゴジャール地区に居住するワヒ族のルーツは、現在のアフガニスタンとタジキスタ

ンにまたがる地域の遊牧民である。アフガニスタンの北東端に位置するワハン(Wakhan)と呼ばれる地域が、ワヒの語源だと言われている。現在、ワヒ族の人々は政治的にアフガニスタン、タジキスタン、中国、パキスタンの4カ国に分断されているが、もとは同じ1つの民族であり、同じ文化を持ち、同じワヒ語を話す。ワヒ語は、ペルシャ語の方言の1つと言われている。

ムルフン村の人々の先祖は、現在のタジキスタンからこの地に移り住み、農業と牧畜を始めた。

(3) 宗教

ムルフン村を含むワヒ族の人達は、イスラム教の内のイスマイル派を信仰している。イスマイル派は、同じイスラム教の他の宗派と比較すると戒律が緩やかである。

イスマイル派と他の宗派との相違点を挙げると次の様になる。

	イスマイル派	他の宗派
礼 拝	3 回 (朝 1 回と夕方に 15 分の間隔をあけて 2 回)	5 回
モスクでの礼拝	女性も参加	男性のみ
巡 礼	義務無し	義務有り
断 食	義務無し	義務有り
その他	女性の教育・社会参加に積極的である	女性の教育・社会参加に消極的である

(4) 生活

僅かながらも自分達の土地を所有し、家畜を飼い、食糧はほとんど自給している。そのため、非常に粗食ながらも、高い自給率を維持している。しかし、村では今、子供達の教育のために現金を必要としている。学校の授業料の支払いや、教科書やノートなどの教材の購入のために現金が必要であるが、標高の高い寒冷地であるため、農業収入には限界がある。これまで村人達は、村の子供達の教育のために様々な取り組みを行ってきた。しかし、村人達が無償で労働力を提供し合うだけでは限界があり、現在収入を向上させるための新たな取り組みが急務となっている。

また、2001年にアメリカで起きた同時多発テロ以来、観光客が激減したことから、村の収入源を観光収入に依存させずに、農業収入の向上を図る必要性を村人たちが認識するようになった。

(5) 村人達のこれまでの取り組み

1970年代に、ムルフン村の人々は村の開発を目的とした組織「Morkhun Village Organization」を発足した。以来、この組織を中心に村をあげて様々なプロジェクトを実施してきた。以下、その例を挙げる。

- (a) 17,600 フィートにおよぶ水路の設置。
- (b) 15万本の木の植樹。
果樹以外。主に建築用。
- (c) 1,000本の果樹の植樹。
現在の果樹の総数は6,000~7,000本。
- (d) 240キロ分の種の播種。
家畜の餌用。
- (e) 3.5キロに亘る環状道路の建設。
- (f) 各家から道路までの路地の建設。
- (g) 小規模水力発電所の建設
材料費はカナダ政府 (CIDA)からの援助。
- (h) 上水道整備。
- (i) 女子高校の建設。
材料を持ち寄り、労働力を無償で提供し、学校の校舎を自力で建設。
1976年竣工。
さらに連邦政府に働きかけ認可を取得。
- (j) 図書館の建設。
上記の女子高校と同様、材料を持ち寄り自力で建設。
都市部の出版社を訪ね図書の寄贈を依頼し、蔵書を徐々に増やす。借りた人から1冊あたり1ルピーを徴収し、司書の給料等の運営費に当てている。
さらに、スクールバスを利用して移動図書館を始め、近隣の村々にもサービスを提供している。
- (k) 小学校の建設。
村で2校目。
- (l) 短期トレーニングの実施
農業、養鶏、家畜飼育、野菜栽培など。
- (m) 村の女性有志がボランティア・グループを作り、毎日農作業を終えた後、

2 時間ずつ手工芸品を製作している。この収益金は現在 100%村の子供達の教育費に充てられており、このボランティア活動が始まって以来、小学校に通えない子供はいなくなった。

(6) 飯島町国際協力会との交流

(a) 林檎の苗木の贈与

飯島町の林檎農家から購入した 10 本の苗木をムルFUN村に贈与。

(b) 綿の種の贈与

飯島町で栽培されている綿の種をムルFUN村に贈与。

(c) 会員による現地視察

2003 年 5 月に代表の橋場みどりと橋場裕二がムルFUN村を訪問。村の視察と人々との交流を行った。その際、近隣の村の視察も実施した(後述)。

(7) 外国からの支援

(a) 1990 年代後半にイギリス人ボランティア (VS0) が 2 年間ムルFUN村に入り、英語教育を支援した。

(b) カナダ政府 (CIDA) の支援で小規模水力発電所が作られたが、当初の計画に問題があり稼動していない。現在カナダ政府に追加支援を要請中。

(c) 在パキスタン日本国大使館の「草の根無償資金協力」により、2002 年に 2 台のスクールバスが供与された。

(d) 国際ソロプチミスト姫路クラブが、ムルFUN村にコミュニティーセンターを寄贈。2002 年 11 月に竣工した。(国際ソロプチミストは、イギリスのケンブリッジに本部を置く国際 NGO 1 つ。専門職についている女性や企業の女性幹部による奉仕団体。)

(e) 未開発地区を含む村全体の開発のマスタープラン作りを日本の建築家である熊谷義信氏が支援中。

6.3 現状および問題点

(1) 標高 3,000 メートルを越す高地であり、現在は春と夏 (3 月 ~ 9 月) のみ農作業を行っている。(厳冬期には氷点下 20 度位まで気温が下がるが、積雪は少ない。)

(2) 主な作物はじゃが芋である。その他に、小麦、豆類、野菜、アズ等を作っているが、ほとんどは自家用である。

- (3) 耕作地の拡大は可能であるが、山岳地帯であるため日照時間の少ない場所や洪水の危険性のある谷沿いが多い。
- (4) インフラ整備が遅れている現状では、ハウス栽培等燃料を必要とする農業技術の導入は困難である。

6.4 資料：パキスタンに関する基礎データ

- (1) 国名：パキスタン・イスラム共和国 (Islamic Republic of Pakistan)
- (2) 人口：1億4,047万人 (2001年)
- (3) 面積：約79万6,096平方キロメートル (日本の約2.2倍)
- (4) 首都：イスラマバード (人口約20万人)
- (5) 州：パンジャブ州 (州都：ラホール)
シンド州 (州都：カラチ)
バロチスタン州 (州都：クエッタ)
北西辺境州 (州都：ペシャワール)
連邦直轄地：首都イスラマバード
部族地域 (少数民族地域)
北部地域 (北部山岳地域)

パキスタンには4つの州の他、連邦直轄地およびカシミール地方がある。インドと係争中のカシミール地方の内、パキスタンが実効支配する約3分の1は、アザド・カシミール (自由カシミール) と呼ばれ、特別州の地位を付与されている。

- (6) 独立年月日：1947年8月14日
- (7) 旧宗主国：インド
- (8) 宗教：イスラム教 (スンニー派) 77%
イスラム教 (シーア派) 20%
ヒンドゥー教 2%
キリスト教 1%
- (9) 言語：公用語は英語。国語はウルドゥー語。
パキスタンの国語であるウルドゥー語を母語とするのは全人口の僅か8%にすぎない。パンジャービー語、パシュトー語、スィンディー語、サライーキー語、バローチー語、ヒンドコー語、ブラーフイー語、ブルーシャスキー語他多数の言語がある。
- (10) 通貨：パキスタン・ルピー (略号はRs.)
2003年5月16日現在、1ルピーは約2円。

7. 現地視察報告

パキスタン人農業研修生受け入れ計画（仮称）に基づき、飯島町国際協力会は、ムルフン村との交流を兼ね、2003年5月、リンゴの苗木を携えた会員の橋場みどりを現地視察に派遣した。ゴジャール地区全体の開発モデルとして注目されるムルフン村未開発地区を含む、全体の開発マスタープランの視察を目的として、都市計画に造詣が深い橋場裕二が同行した。

以下、視察者の報告を記す。

ムルフン村は、全く想像もしなかった岩山に囲まれた村でした。テレビでは、そんな外国の風景は見慣れていたはずなのに実際に目にした時、グランドキャニオンとアルプスと一緒にあったような岩山が迫ってくる風景に言葉がありません。

豊かな緑に囲まれて生活している私達にとっては、緑があることがあたりまえのこと、何もしなくても自然に生えてくる物です。それがここでは違います。

緑豊かな大地に生活していくのではなく、岩と砂の大地に緑を作って生活して行く所だった。何もかもが不足している貧しい村です。木々も穀物も雑草さえも乏しく貴重なのです。雑草さえ作って行かなければならないとは、雑草は生えてくれては困る邪魔物でしかない私達の生活では考えられないことです。

驚きの次にくるのは、大きな溜息です。なんと気の遠くなるような時間をかけ困難な努力をしてきた民族なんだろうと。

こんな貧しい生活が存在することも驚きですが、その生活は貧しさに負けることのないきちんとした美しい生活です。村人は人懐っこく信仰心に厚く、勤勉であり年長者を尊び子供の躾も厳しい。そして今、日本では失いかけている共同体があります。かつての日本を見ているようです。妙に懐かしく、安心できたのはそんな彼らの生活からかもしれせん。

しかし、ムルフン村は何もかも不足している村です。現在より農業収益を上げる事は皆無です。農業収益をあげる手立てとして技術力の向上は必至です。

今、ムルフン村で大きな期待を寄せている事業にリンゴ栽培による収益の向上があります。

この世界に誇れる飯島町のリンゴ栽培技術をムルフン村の皆様に伝えることができるならムルフン村にとっては、大きな希望と収益を実現できることと思います。又、飯島町のリンゴ農家が抱える問題についても解決の糸口となることも期待できます。

この計画については是非々々、町のご理解とご協力をお願い致します。

以 上